

地震

ふじさわき正三

(一) 幸せな生活と地震の発生

野々村啓介は、ある製鋼所の総務課長をしています。妻の野々村久美は、ある大学の英語の講師をしています。野々村啓吾は、市立中学二年生です。野々村はるかはある有名高校一年生です。となりのおじいさん吉村健吉さんは、若いころ、大阪で料理店を営業していました。妻の吉村よしさんは、健吉さんと結婚する前は、ある有名旅館の仲居をしていて、やさしくて美しい人です。啓介の家の前の前田一郎さんは、市役所に勤務しています。若い妻の前田亜矢子さんは、ピアノの先生で、活発な人で、人気者で朗らかでかわいい人です。

この三軒の家族はいつもいろんなことを話し幸せに生活していました。啓介と久美は共働きなので、よくはるかは、よしさんのところに学校から帰ると久美が帰ってくるまで時間をつぶしていた。健吉さんとよしさんとの間には孫はおらず、はるかを孫のように可愛がってくれていました。

なぜか、啓吾は一郎さんと気が合うのか、よく魚釣りに一緒にいっていた。そんなことは、啓介はあまり知らなかったのです。はるかがよしさんと健吉さんのところにいっていたことは、久美から聞いていて啓介は知ったのです。

啓吾は、あまりを話をしない子でもありませんでした。はるかはよく話をし家族を笑わせてくれました。友人も多くいたが啓吾は友人は少なかったです。はるかとは性格も反対でした。でも啓吾は久美のことが大好きでなんでも話していたそうです。

だが、一週間に一度は、どこかの家で三軒よって夕食会を一緒にしていました。

健吉さんの七十歳の誕生日は一月十六日でしたので一週間の一度の夕食会も健吉さんの七十歳の祝の日にしたのです。その場所は野々村家となりました。啓介、久美、はるか、啓吾、一郎、亜矢子、よし、本人健吉との祝宴をしたのです。その時、はるかが挨拶をしました。「おじいちゃん、おめでとう。いつまでも元気で、私がお嫁さんになるまで忘れないでね。また遊びに行くから」と笑顔で言ったのです。そして健吉さんが「ありがとう。はるかちゃんがお嫁さんになるまで生きているかな」と言っただけで本当に楽しそうでした。その夜はみんな、楽しくいろんなことを話していましたが、啓介は十七日は朝早く会社に行かなくてはなりませんので、早く寝ることにしました。他のみなさんは十二時ごろまでしていたそうです。

健吉さんの家は、啓介の家より五年前に建てて、木造の家です。啓介の家も三年かけて木

造の新築の家を健吉さんの家の横に建てたのです。一郎さんの家は鉄筋造りで近代的な若者風の家でちよつと風変わりな家です。

啓介は朝四時半ごろ起き、みんなは夜は遅かったのでぐっすり寝ていたようであったので、みんなを起こさないように着替えて、朝食は会社の前のファミリーストランで食べるつもりだった。啓介は、はるかとの別れがこれで終わりだとは夢にも思わなかった。

平成七年一月十七日朝五時半ごろ、まだ外は暗く、雪まじりの冷たい雨が降っていた。ドアを開けた途端、山の方から「ゴオー」という地鳴りが聞こえてきました。一瞬、地面を突き上げるような音が体が空中に浮かんだと思うと、今度は大きく横揺れがし、立ってられない状態であったので、玄関の石にしがみついた途端、木造の家が一瞬にして倒壊してしまつたのです。隣の健吉さんの家も同様です。啓介は思わず、久美、はるか、啓吾の名前を呼び続けましたが返事がありません。また大きな横揺れがきます。啓介は無我夢中で大声で久美、はるか、啓吾の名前を言ひ続けました。そうすると、かすかに啓吾の声がします。啓介は声をする方に向かってガレキを素手で取り除きました。そうすると手と頭が見えてきたのです。啓吾の手が届くところまでガレキを除けましたが、なかなか啓吾の左足が挟まって抜けません。まだ横ゆれは続いています。そうしているうちに、隣の家のガレキの中から健吉さんとよしさんが這い出てきました。健吉さんは一緒に啓吾をガレキを除けて引き抜き出してくれました。

久美とはるかの声はしないのです。また強い揺れがするたびに建物の倒壊する音が聞こえます。啓吾がぶるぶる震えています。それを見たよしさんが、家のガレキの中から毛布を引っ張り出し、啓吾にかけてくれました。そして、よしさんは青ざめて震えている啓吾の背中をさすっています。

まだ暗い闇の中、余震は続いている。雨が降っているが少しずつ明るくなっていく感じがしました。よくみると、道路は地割れしています。植木も倒れ、奥にあるアパートも全壊状態です。前の一郎さんの家は立っています。啓介は、頭から血が流れ、手足は傷だらけですが本人にはわかりません。一郎さんと亜矢子さんが飛んできて、啓介の頭をタオルでしばってくれ、手足もタオルを巻いてくれました。その時、初めて、ずきずきとする痛みを感じたのです。まだ余震が続いています。どれぐらい続くのだろうか。啓介は思っていました。もう啓介の体は限界を感じ、死んだ気持ちでしたが、久美も、はるかも、啓吾もいると思うとこんな弱い気持ちではと思つたのです。少し落ち着いたところで、啓介は啓吾に「おかあさんとお姉ちゃん」ときくと、小さな声で「お母さんは、起きて、台所にいたよ。お姉は、二階で、まだ寝ていたよ」と言つたのです。いつも、啓吾は玄関の横の部屋で寝るのです。はるかは二階です。啓介と久美は一階で寝るのです。

外が明るくなってくると状態がわかってきました。街は倒壊し、建っている家は少なく、かろうじて建っている家は、鉄筋コンクリートの家ぐらいなのです。

奥のアパートから、若い母親らしい人が全裸の姿で、子供をかかえ、もう一人の子供の手を引き、頭から血を流し、子供も血を流し、ふらふらとわけのわからない言葉を言つて歩い

ています。子供は恐ろしかったのか泣きもせず、母親に引つ張られて歩いています。それを見かねたよしさんが、毛布を子供に着せてやりましたが、母親は知らない顔をしています。血まみれで歩いている、血が地面にポト、ポトと落ちています。そうしていると、消防隊員の人が、その人の体を毛布で巻き、車にのせていったのです。他には、腰を抜かして道路に座っている人、頭から血を流し走っている人、いろんな人が道路に横たわっています。そしてまだガレキの中で悲鳴を上げている人、ガレキに挟まれて人たちが多くいます。久美もはるかもその中に入ります。

静かな街が一瞬にして地獄の街に変わったのです。その時、一郎さんが救急車を呼んでくれたのです。隊員の人に「このガレキの中に妻と娘がいます」と言うと隊員の人「わかりました。ここは私たちにまかせてください」「お父さんとお子さんとおばさんは早く車に乗ってください」と言われました。よしさんも手に怪我をしているのです。啓吾の足を見るとだんだんふくれてきたのです。

健吉さんと一郎さん亜矢子さんは、久美とはるかさがすと行って、その場に残りました。小雨の中、みんな黒い顔をしています。啓介は頭の上から足の先まで血だらけです。

まだ、体を感じる余震が続いています。車に乗っていてもわかる状態です。啓介は車の窓から外を見ると、家は倒壊し、道路は寸断され、道路に血を流して歩いている人、道端に座り込んでいる人、街は生き地獄に変わっていました。車からもガレキの中から人の悲鳴が聞こえるような気持ちになります。救急車もサイレンをならして走っていますがなかなか前に進まない。街全体がパニック状態なのです。啓介は、生まれてはじめて、こんなに悲劇的な状態を体験したのです。よくテロや戦争をテレビで見ることがありますが、まったくそれと同じです。啓介は車の中で、足がガタガタ震えました。恐ろしいのではなく、これがなぜかわからないのです、別世界と思われる光景だったのです。

(二) 病院にて

救急車は、病院が見えるところまで近付いてきたので、啓介は隊員に言った。「近付いたので歩いていきます。よしさんいいですね」と言うとよしさんもうなずいてくれた。隊員の人「お子さんだけは、足が折れています。私の方も病院に報告がありますので、お子さんを背中におんぶしていきましょうか」と言ってくれ、救急車は隊員の一人と啓介たちをおろし、すぐ救急車を待っている人のところにサイレンを鳴らして走っていきました。

病院の前は救急車で一杯です。病院の玄関に入ると赤黒い血がべったりついていて血のおいがあります。医師や看護師たちは白い服が血で汚れて、赤黒色をしています。待合室も廊下も患者で一杯です。

次から次へと救急車がやってきて、病院もパニック状態です。体に余震がまだ伝わるたびに悲鳴が聞こえます。病院の中は地獄絵巻のようです。子供の泣き声、壁のひび割れが目立ち、いつ倒壊してもいいような状態の病院の中です。あちらこちらから騒がしい音が聞こえ

てきます。啓介と啓吾は治療が終わり、病院の片隅で座っていると、今まで元気よく泣いていた子どもが、突然、泣きやんだのです。看護師さんが飛んできて、その子どもを別の部屋につれていったのです。病院まで生きてきたのに病院で亡くなることが多いそうです。なんと悲しいことです。そう想っているうちに、妻が救急車で運ばれてきたのです。妻は意識がなく、すぐに集中治療室に運ばれたのです。その時、一郎さんも、健吉さんも、亜矢子さんと一緒にきたのです。啓介はすぐはるかのことをたずねました。一郎さんは「懸命に消防隊員の人、自衛隊の人もさがしています」との返事であった。啓介は、はるかのことが心配でたまりませんでした。

病院では、血のにおい、人のにおいと異臭がただよっています。でも、そのにおいがかがなくてはありません。窓を開けても、外も異臭がただよっています。外はもっとひどいものです。それと、いつもいつも体がゆれているような気持ちになります。

病院の中では気分が悪くなってきそうです。病院の中は、本当の生き地獄のようなものです。

(三) 青いテント

病院の庭には、青いテントが設けられていた。今度は救急車は、その青いテントの前にとまり、そこから病院内に運ばれる。病院の前の公園にも青いテントが多く作られてきた。しばらくすると、役所の人がやってきて「テントに案内します」。それは、公園に建てられた青いテントです。

そこは一時寝るところだ。寝るのは、健吉さん、よしさん、一郎さん、亜矢子さん、啓介、啓吾の六人です。六人分の弁当とお茶、トレイナー、下着、黄色いビニールのジャンパー二枚ずつ持ってきました。そこで交替で着替えることにしました。寝るときは川のようになって寝ましたが、まだ地面は冷たさが体に伝わってきます。まだ地面がゆれているような気がしてなりません。青いテントの中では寝ることができませんでしたので、みんなでいるんなことを話しました。とくに、健吉さんの息子さんはハワイで日本料理の店をやっているそうです。亜矢子さんの実家は堺だそうです。一夜中寝ないで話しました。でも啓介ははるかことが心配でならなかった。これは心配しても仕方が無いと思っていたが、どうしようもないことであったが、啓介としては、どうなっているか知りたいことです。

(四) 死体安置場

朝九時ごろです。テントに警察官がやってきて「野々村さんですか、娘さんらしい死体が発見されました。確認しにきてください」と言われたときは、啓介は震えがとまらなかった。

どうか娘でなくてほしいと願うだけでした。すると健吉さんが「落ち着いて、私も一緒にいったげるから」と言われ、啓介は少し気持ちを落ち着かせた。啓介と健吉さんは警察官に案内

内されて、近くの体育館にいきました。あたりは異様な雰囲気におおわれていた。異臭もただよっていた。その体育館が死体安置場である。体育館の玄関に入ると、赤黒い血で床下もベトベトであり、異臭が漂っている。なんとも言えない血のにおいと人のにおいであった。血まみれになった医師、看護師さんたちの姿が見受けられる。ところどころで大声で泣き叫ぶ声、しくしくと泣く声が聞こえてくる。なんとも言えない雰囲気であります。健吉さんが左側の死体から啓介は右側の死体から見ることになりました。体育館の中は涙、涙、涙ばかりであります。啓介は恐る恐る、一人目の毛布がかかった死体をあけてみると、頭がありません。二人目を開けてみると真っ黒く焼けて性別がわかりません。異臭がして、啓介は口と鼻をハンカチでおさえながら、三人目の毛布を開けてみると、今度は両手足がありません。四人目の死体を開けてみると内臓が飛び出ていて、これが人間とは思えない状態です。啓介はその場に座り込みました。足が震えて動くことができません。冬なのに顔に汗が流れてきます。しばらく躊躇して勇気を出して恐る恐る五人目の死体を開けてみると、真っ黒な顔手足、寝巻き姿の女の子です。啓介は「ピン」ときました。たしかに娘です。すぐ健吉さん呼びました。もう一度確認してほしかったのです。健吉さんは飛んできてくれて「たしかにはるかちゃんだね」と言ってくれ、啓介はその時は涙も出ませんでした。頭の中は呆然としてなになにやわからない状態でした。その場に座りこんでいたのです。その時、熱いタオルを二、三枚とバケツにいったお湯を持ってきてくれた人がいます。その人の顔はよくみていません。その人が「父さん元気を出して、仏様の体を拭いてあげてください」と言われ、啓介は震える手で、その女の子の顔を拭くとたしかにはるかです。そのとき啓介は我に帰りました。顔を拭き手足を拭き黒く汚れている寝巻きをぬがせて体を丁寧に拭いていると、自然に大粒の涙がこぼれてきました。啓介は震える手で大粒の涙を流しながらはるかのかの体を拭いてやると、まだ寝ているような顔をしていました。健吉さんも横で涙を流していました。健吉さんが「なぜこんなに若い子をつれていくのか神さまは何を考えているのか」とつぶやいていました。

体を拭き終わると、タオルを持って来た看護師さんがはるかに化粧をしてくれました。そして白い寝巻きを着せてくれると、なんと天使のような美しいはるかになりました。今にも「お父さんここで何をしているの」と呼びかけてくれるような気持ちになったのです。啓介の頭の中では苦しかったろう、悲しかったろう、痛かったろう、冷たかったろうと思っただけです。そしてあの地獄をうらむしかなかったのです。それからしばらくして、役所の人がありました。「これにサインをくれませんか」と言われ、啓介は知らないままその書類にサインをしました。そうすると二人の人が来て、はるかを桶箱の中に居れ、別のところに安置されました。そこは仏様がいらっしゃるようです。体育館の中は次から次へと死体が運ばれてきます。いたるところで泣き声が聞こえ、騒然とした雰囲気です。

啓介は健吉さんと、とぼとぼとテントに行った。テントに着くと待ちかねたように、啓吾が「お姉ちゃんは」と聞きます。啓介は何も話しませんでした。いつもケンカばかりしている啓吾も心配でたまらなかったのでしょう。その時健吉さんがこう言ってくれました。「啓

くん、よく聞いてね。はるかちゃんは、もうこの世にいないの。啓くんの心の中に生きているの」と言います。それを聞いていた亜矢子さんが泣き出しました。啓吾は、呆然とした雰囲気でした。たぶん信じられなかったのでしょう。啓吾も涙をおさえているようでした。亜矢子さんは涙が出て止まらなかつたようです。それを聞いた一郎さんは、安置場に行つてみたそうです。一郎さんも帰つて来て「啓介さん、はるかちゃんは立派なところで安置されていますよ」と言つてくれました。テントの中は涙、涙、涙ばかりです。だけど啓介は久美のことも心配でした。

(五) 仮設テントの中で

仮設テントにいてももう夕暮れになってきました。一郎さんが弁当とお茶を持ってきましたが、啓介はなかなか口に入りません。頭の中では、あの死体のことなどが頭の中をうずまいているのです。

まだテントの中にも地面がゆれているような気持ちになります。(そう余震はない。)まだ地面は冷たく、啓介は、久美のことが心配で病院に行つてみると、テレビの前は人ばかりです。その時、はじめて「阪神淡路大地震」と知つたのです。啓介はテントに帰つても眠れません。その夜は、他のテントの中で泣き声が聞こえてきます。静かな夜に響き渡るのです。一つのテントだけではありません。頭がおかしくなるような気分になってきました。その夜中起きていました。朝方少しようとしていけると、朝十時ごろです。妻の久美が意識が戻つたと通知がありました。

健吉さんとよしさんは啓介が寝ている間、近隣の人の手伝いをしています。啓吾は病院から松葉杖を借りています。亜矢子さんも一緒にいってしてくれます。一郎さんは忙しく、役所に行っていました。

久美と会いましたが地震のことはまったく知りません。啓介のことすらもうろうとしている状態ですが啓吾のことは覚えていました。啓吾が話しかけると返事をするだけです。あとはなにがなにやらわからない状態ですので、啓吾ははるかが亡くなつたことは話しませんでした。もちろん、健吉さんよしさん一郎さん亜矢子さんのことは忘れていません。唯一啓吾のことだけは忘れられないと思います。先生いわく「時間がくるとだんだん思い出してくるでしょうけれど、思い出したとき、うつ状態になるかもしれないね」とのことです。それも地震のおかげです。うらんでもうらみきれません。日本は自然災害になんと弱いのだろうかつくづく思いました。だけど啓介の家族だけではありません。多くの人がこの災害にあつていのです。災害にあつた人は素手で自分の親、子どもをガレキを一本、一本、掘り起こしたのには違いありません。啓介もその一人です。

(六) お世話になった人との別れ

地震から数日がたち、健吉さんとよしさんの息子さんがこの地震を知ったのか、仮設テントを訪れてきました。息子さん夫婦は、健吉さん夫婦をハワイにつれていきたいとのこと。息子さんは役所の人と相談した結果、ハワイに行くことに決まりました。啓介と啓吾は別れるのがつらく涙が流れる思いでした。健吉さんとは啓介が家を新築するときからお世話になり、よしさんにも啓介家族は大変お世話になったのです。健吉さんは、きちんとハワイで生活するようになったら日本に帰って来る、こう言いました。「啓介さん、まだ両家に建物は無いけれど、土地はありますからね」「かならずまた会いましょう」と言ってくれました。

その日がやってきました。啓介、一郎、亜矢子、啓吾は、伊丹空港までおくることにしました。啓介は、飛行機が見えなくなるまで空港にいて、涙をふいても次から次へと涙が流れてきます。そしてしばらくすると、久美が病院から退院し、仮設テントで一一緒に暮らすことになりましたが、そこから一週間に一度は通院です。いつも、啓吾がついていきました。亜矢子さんも一緒にいつてくれたのです。一郎さんは役所に、啓介は会社へといっています。

それから数日がたち、今度は、一郎さんと亜矢子さんたちが仮設テントを出ることになりました。亜矢子さんの実家は堺ですから一郎さんは亜矢子さんの実家から西宮まで通勤し、よく役所が終わると、啓吾と久美のところによって帰ったそうです。啓介は、会社のことが忙しくていつも仮設テントに帰るのは七時頃です。亜矢子さんも一週間に一度は来てくれていたそうです。

(七) 仮設住宅での出来事

仮設住宅は小学校の運動場の隅に建てられています。一郎さんがまつさきに住宅を世話してくれました。仮設住宅に入居するときです。久美が突然「はるかは」と言い出しました。啓介はとっさに「はるかは入院している」と言う。「病院に行かなくては」と言うのです。啓介ははるかが亡くなったことはよ一言わなかつたのです。久美は啓吾をつれて病院にいつて「野々村はるかの病室はどこですか」と訊いたのです。病院の職員さんは「当病院には入院していませんが」と言う。久美は怒り出し、それを見ていた啓吾が本当のことを言ったのです。久美は呆然となり、ふらふらと仮設住宅に戻ってきました。それから口をききませません。涙を出しません、空を見ているだけです。それから亜矢子さんが来てくれても返事もしません。啓介ははるかのことを話しました。その時、亜矢子さんが「おばさん、はるかちゃんはいつもおばさんのところにいるよ」と言ってくれたのです。その時は久美は少し笑顔になります。亜矢子さんは啓吾と久美をつれて、病院にいつてくれます。啓介は会社に行かなくてはなりません。

ある日のことです。久美は五時半頃になると起きて「はるかお帰り」と言うのです。そん

なことが二、三日続き、今度はわからないことを言い出したのです。一晚中寝ないときもありました。だんだんうつ病がひどくなった日のことです。妻が「はるかのところに行くからお父さんごめんね」と言ったときがありました。それは啓介が八時頃、会社から帰った時です。その時は啓吾は、啓介のかわりに集会場の会議に出てくれたのです。啓介は一晚中、近隣をさがしました。啓吾も近隣の人と、さがしてくれましたが、見つかりません。しばらくさがしていると、近隣の人がはるかの墓の前で倒れていると伝えてくれました。病院に救急車で運ばれたときは、多くの菓を飲んでいたので。啓介は二重の悲しみに襲われ、目の前が真っ白になりました。啓介は思ったのです。この災害を恨むしかありませんでした。啓介は本当に、久美がはるかのところについて幸せだったのでしょうか？ そんなことがあって啓介は体も心も疲れ果て、脳内出血で倒れ入院しました。啓吾は仮設住宅で一人になりましたが、時々一郎さんと亜矢子さんが来てくれるそうです。啓介は一郎さんと亜矢子さんには感謝の気持ちでいっぱいでした。病院にもよく亜矢子さんは来てくれます。啓吾は毎日のように来ます。啓介は、はるかも、久美も財産も、病気で一切失いました。これ以上、失うものはないと思っていたのですが、まだ失っていないものがあることに気付きました。それは啓介の心といのちです。

神様だって、まだ心といのちを失わせない気持ちでいっぱいなのでしょう。

啓介は、今は、施設という箱の中で一生を生き、死んでいくと想うと悲しくなるときもあります。はるかも、久美も、啓介の両親も啓介のそばで風になって見守ってくれていると想うと幸せかもしれません。

これが啓介の運命かもしれません。これからも、運命との闘いが続くだろうと想っています。

今でも施設で寝ていても、はるかが「お父さん頑張れ」と言っているような声が聞こえるときがあります。

この声は啓介が死ぬまで続くでしょう。

啓介は施設にいるのがあの災害からもう十五年になります。啓吾は結婚して子供がいます。悲しいことに健吉さんはハワイで、息子さん夫婦にみとられて亡くなったそうです。時々、ハワイからよしさんの手紙がきます。啓介は施設にいてそれを楽しみにしているのです。もうよしさんも八十歳近くになっていると思います。手紙の便りによると元気だそうです。啓介は、この災害のことを忘れず生き抜いていきたいと思っています。

※この作品は一部体験を交えながら、一部フィクションとして書いたものです。